

2024 年 10 月 9 日
SOMPO ケア株式会社

「未来の介護」に関する調査を実施
～約 8 割の人が、データ・テクノロジーを活用した介護を受けたいと回答～

SOMPO ケア株式会社（本社：東京都品川区／代表取締役社長 鷲見 隆充、以下、「当社」）は、全国の 30 代～60 代の男女各 500 名を対象に「未来の介護」に関する調査を実施しました。

本調査によって、介護に関する親世代との話し合いの有無や、自身に介護が必要になった場合の介護サービス利用意向について明らかになりました。加えて、高品質なケアの提供と職員の業務負担軽減を目指して、当社が「未来の介護」と呼称し、積極的に取り組むデータ・テクノロジーを活用した介護サービスに対する考えなどについて回答してもらいました。これからの介護に関する実態や意識が分かる調査結果となっています。

調査結果のポイント

◆ 介護に関する話し合いについて

- ・ 約 8 割（78.8％）の人が、親と介護について話し合いができていない。
 - 話したことがある 30 代は 1 割以下（9.2％）。80 代以上の高齢な親がいる 60 代でも 4 割を下回っており（39.2％）、6 割以上は話し合っていないことが明らかになった。

◆ 介護方法について

- ・ 将来親に介護が必要になった場合、「まだ決めていない・分からない」と回答した人を除くと、「介護施設（老人ホームなど）を利用する」と回答した人の割合が過半数の 56.0％。次いで「自宅で介護サービスを利用して介護する」が約 3 割（33.6％）だった。
- ・ 自身に介護が必要になった場合は、「まだ決めていない・分からない」と回答した人を除くと、「介護施設を利用したい」が 7 割を超える結果（71.9％）となった。
- ・ 介護を頼みたい相手は「介護士・ヘルパー」と回答した人が最も多く 6 割超の 66.1％。一方「自分の子ども」と答えた人は、わずか 6.0％と 1 割に満たなかった。

◆ テクノロジーと介護について

- ・ 介護現場でデータやテクノロジーが活用されていることに対して、「知っている」と回答した人は 1 割未満のわずか 6.5％だった。
- ・ 一方、データ・テクノロジーを活用した介護サービスを受けたいと答えた人は約 8 割（78.2％）。
 - テクノロジーを「活用したほうがよい」、「一部活用したほうがよい」の合計値が最も多かったのは「排泄」で、92.1％。
- ・ 介護のデータ・テクノロジー活用には「介護の負担軽減」を期待する人が多い。一方、人にしかできない介護は「心の通ったコミュニケーション」と考えている人が多い。

調査結果の詳細については、次ページ以降を参照ください。

1. 調査実施の背景

少子高齢化が進み、高齢者の人口が年々増加している日本においては、介護サービスを必要とする人とそれを提供する人のバランスが大幅に崩れる「介護人材の需給ギャップ」が深刻な課題となっています。これに対し、当社は「介護人材の需給ギャップ」を解消するため、データ・テクノロジーを積極的に活用し、人が人にしかできない介護に注力できる環境を整える取組みを「未来の介護」と呼称し推進しています。技術の進歩によって介護におけるデータ・テクノロジーの活用も進んでおり、高品質なケアの提供と職員の業務負担軽減が両立し、より快適で、一人ひとりに合った介護サービスの提供が可能になってきています。

今回、当社が推進する「未来の介護」の取組みに対する受容度を探るために、まずは介護について現在どのようにとらえられているのか、実態調査を行いました。30～60代という幅広い世代に、親や自身に介護が必要になるといった、将来起こりうる介護についてどのように考えているのか尋ねたほか、データ・テクノロジーを活用した介護に対する考えや、介護において人にしかできないと思うことは何か、回答してもらいました。

2. 調査概要

- (1) 調査方法：WEB アンケート調査
- (2) 調査テーマ：「“未来の介護”に関する調査」
- (3) 調査対象者：全国の30代～60代の男女各500名
(自身が介護を受けていない、かつ、自身の親が存命の男女)
- (4) 調査期間：2024年7月29日～30日
- (5) 調査主体：SOMPOケア株式会社
- (6) 調査機関：株式会社ネオマーケティング

3. 調査結果

設問および分析結果は以下の通りです。

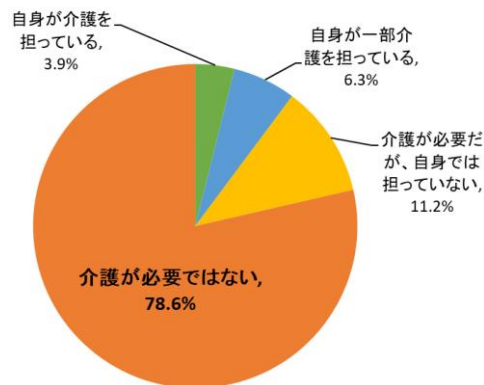
Q1. 現在、両親（義父母を含む）の介護をしていますか。（単一回答、n=1000）

※両親：自身の父親と母親または、そのどちらか

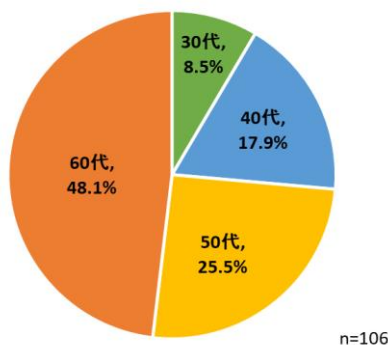
※義父母：配偶者の父親と母親または、そのどちらか

- ・ 78.6%の方がまだ「両親（義父母を含む）の介護が必要ではない」と答えた。
- ・ 両親の介護が必要と答えたのは、親世代が80代以上と想定される60代が最も多い。
- ・ 60代に注目すると「介護が必要だが、自身では担っていない」と答えた人は、男性22.4%に対し女性が20.8%と大きな差はない。一方「自身が介護を担っている」と答えた人は男性7.2%に対し女性は14.4%と、約2倍の差がみられた。

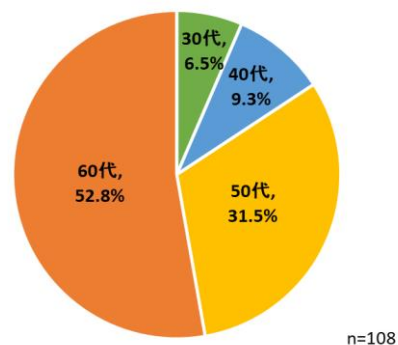
両親の介護が必要な人の割合（全体）



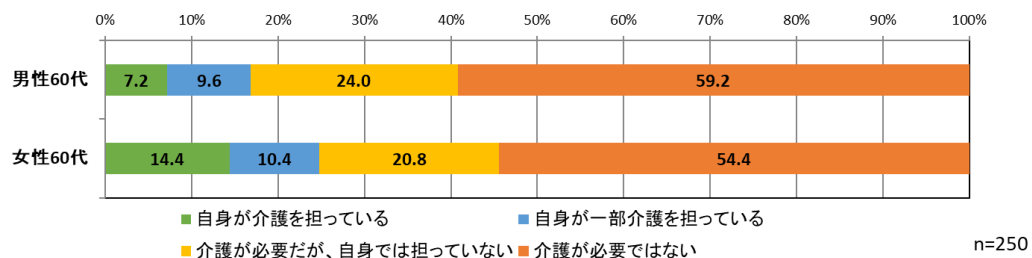
両親の介護が必要な人の割合（男性）



両親の介護が必要な人の割合（女性）



60代の回答状況



Q 2. 両親（義父母を含む）の介護※について話し合ったことはありますか。あてはまるものをそれぞれお答えください。（単一回答、n=1000）

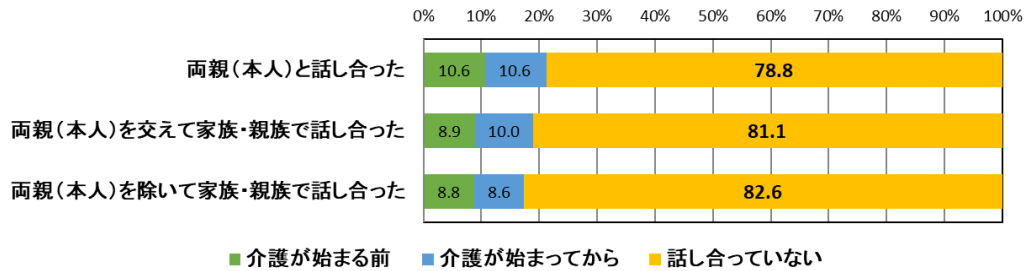
※両親：自身の父親と母親または、そのどちらか

※義父母：配偶者の父親と母親または、そのどちらか

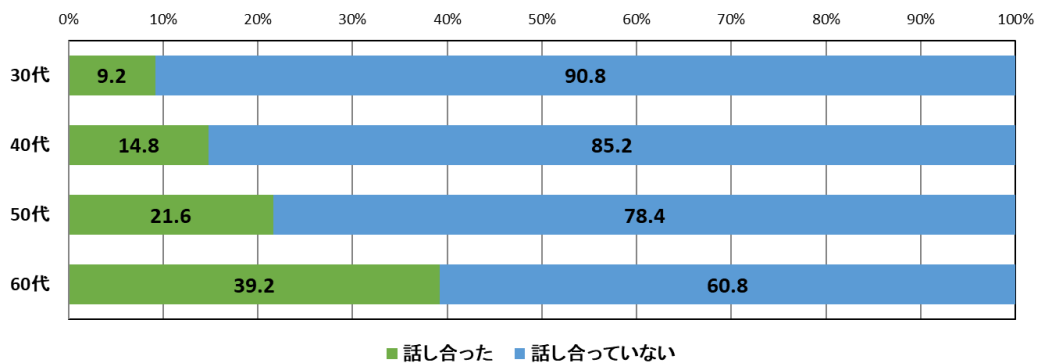
※介護が必要ではないご両親がいる方も、将来について話し合っているかお答えください

- ・「両親（本人）と話し合った」の項目では、「話し合っていない」と答えた人が 78.8% となり、約 8 割の人が話し合えていないことが分かった。
- ・年代別にみると、「両親（本人）と話し合った」と答えた人は、30 代では 9.2% と、1 割を下回る結果となった。また、親世代が 80 代以上と推測される 60 代でも 39.2% と 4 割を下回っており、半数以上が介護について話し合えていないという結果となった。

介護に関する両親(本人)との話し合いの状況



「両親(本人)と話し合った」について、世代別の回答



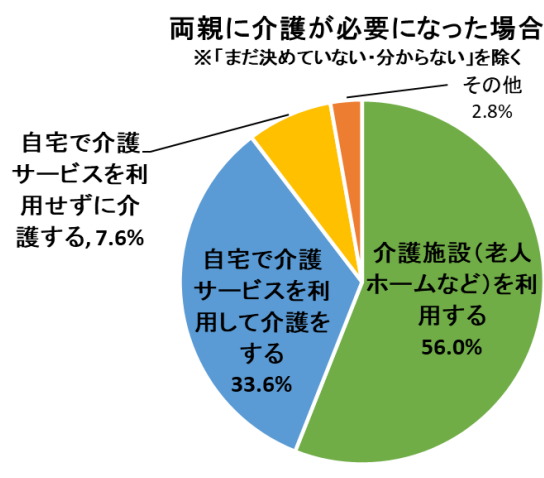
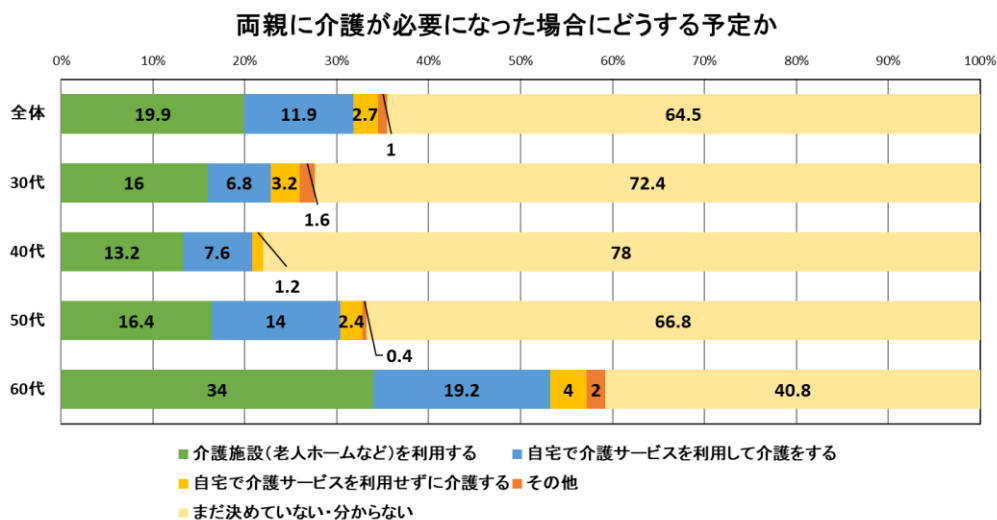
Q 3. 両親（義父母を含む）に介護が必要になった場合はどうする予定ですか。（単一回答、n=1000）

※両親：自身の父親と母親または、そのどちらか

※義父母：配偶者の父親と母親または、そのどちらか

※すでに両親の介護をしている人は、現在どのように介護しているかを教えてください。

- ・ 全体では「まだ決めていない・分からない」と回答した人が最も多く、64.5%となった。
- ・ 30代から50代までは「まだ決めていない・分からない」と回答した人がいずれも6割を超えていたのに対し、60代は40.8%と5割を下回る結果となった。
- ・ 「まだ決めていない・分からない」と回答した人を除いた、意向がある程度決まっている人の中では、「介護施設（老人ホームなど）を利用する」と回答した人が56.0%、「自宅で介護サービスを利用して介護する」と回答した人が33.6%で、約9割の人が介護施設や介護サービスの利用を希望していることがわかった。なお、「自宅で介護サービスを利用せずに介護する」は最も少なく、7.6%となった。



＜回答の理由＞

・ 介護施設（老人ホームなど）を利用する

- 「各自の生活をこなすため。また、本人の希望」（大阪府・66歳女性）、
- 「介護による負担および心労の方が、デメリットがあると考えられるため」（愛媛県・44歳女性）
- 「自宅は衛生面、居住性などにおいて不十分だと思うから」（大阪府・51歳男性）
- 「自分ではどうにもできないこともあるだろうから、他人の手をお借りしたい」（奈良県・32歳女性）

・ 自宅で介護サービスを利用して介護をする

- 「自宅が大好きなので、できる範囲でヘルパーさんなどと連携して介護をして、どうしようもない状況になればホーム利用を考える方向」（福島県・51歳女性）
- 「家族の負担を減らしたいが、同居したいと感じたから。」（東京都・51歳男性）
- 「親が自宅での介護を望んでいるから」（石川県・63歳男性）

・ 自宅で介護サービスを利用せずに介護する

- 「世話になったのだから他人の手を借りずに自分で世話をしたい」（愛知県・64歳女性）
- 「サービスを使いたい本人が拒否している」（北海道・56歳女性）
- 「自分ができるうちは親の介護は自分でしたい」（和歌山県・54歳男性）

・まだ決めていない・分からない

「まだそのような状況ではないから」(埼玉県・44歳男性)

「時間がなく考えられていない」(香川県・49歳女性)

「その時にならないとわからない」(神奈川県・62歳女性)

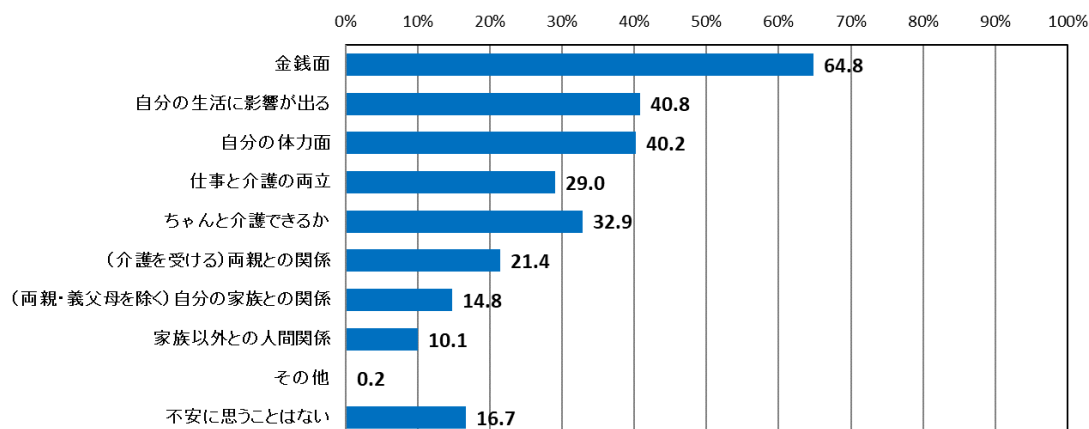
Q4. 両親(義父母を含む)の介護に対して不安に思うことをすべてお答えください。その中で、最も不安に思うことを1つ教えてください。(複数・単一回答、n=1000)

※両親：自身の父親と母親または、そのどちらか

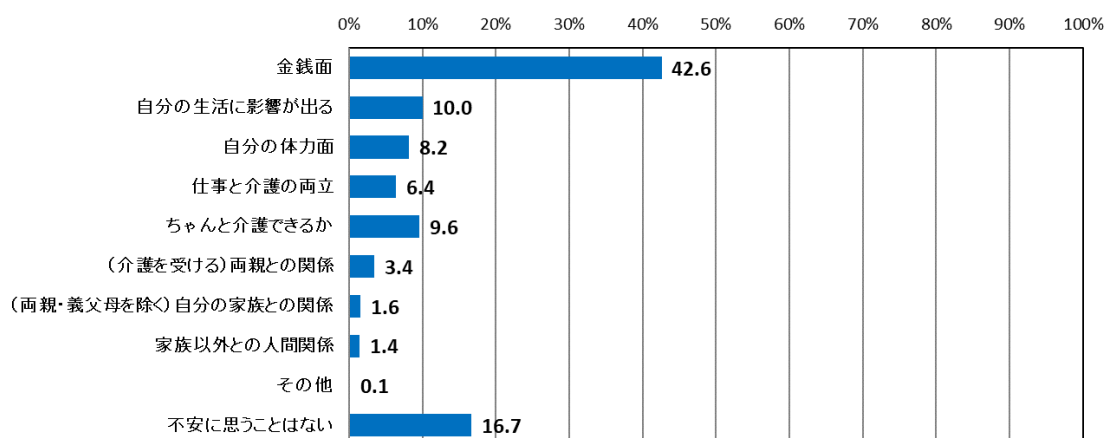
※義父母：配偶者の父親と母親または、そのどちらか

- ・「不安に思うこと(複数回答)」では、「金銭面」「自分の生活に影響が出る」「自分の体力面」の順で多い結果となった。
- ・「最も不安に思うこと(単一回答)」の中では「金銭面」と答えた人が圧倒的に多く、42.6%。次いで回答が多かったのは、複数回答と同様に「自分の生活に影響が出る」「自分の体力面」だが、それぞれ10.0%、8.2%と、「金銭面」と比較するとかなり少ない結果となった。

不安に思うこと(複数回答)



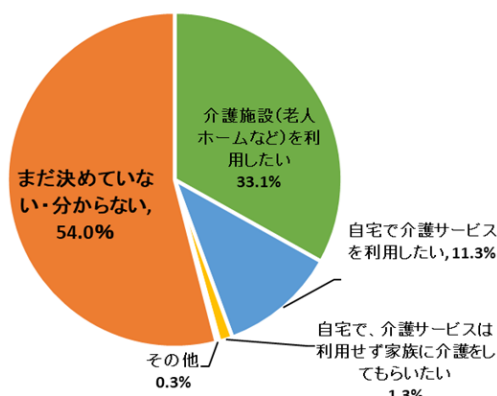
最も不安に思うこと(単一回答)



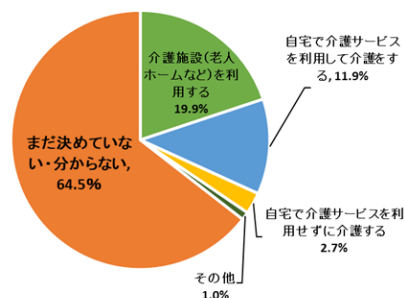
Q 5. 自身に介護が必要になった場合はどうしたいですか。(単一回答、n=1000)

- ・「まだ決めていない・分からない」と回答した人は54.0%で、Q 3の「両親・義両親に介護が必要になった場合(64.5%)」と比較すると、やや少ない結果となった。
- ・「まだ決めていない・分からない」と回答した人を除いた、意向がある程度決まっている人の中では、「介護施設(老人ホームなど)を利用する」と回答した人は71.9%で、Q 3の「両親に介護が必要になった場合」よりも多い結果となった。「自宅で介護サービスを利用して介護する」と回答した人も24.6%と、4人に1人が希望する結果に。

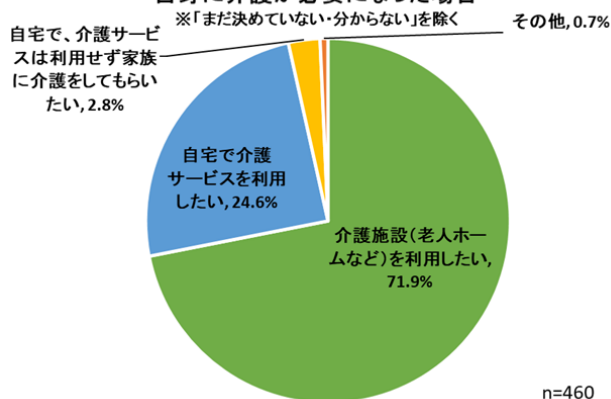
自身に介護が必要になった場合



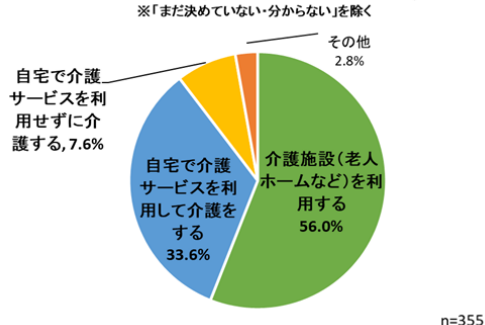
参考: 両親に介護が必要になった場合(Q3)



自身に介護が必要になった場合



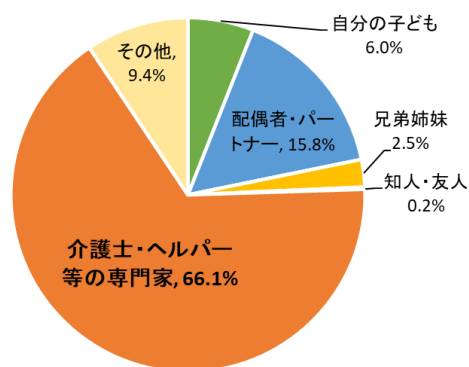
参考: 両親に介護が必要になった場合(Q3)



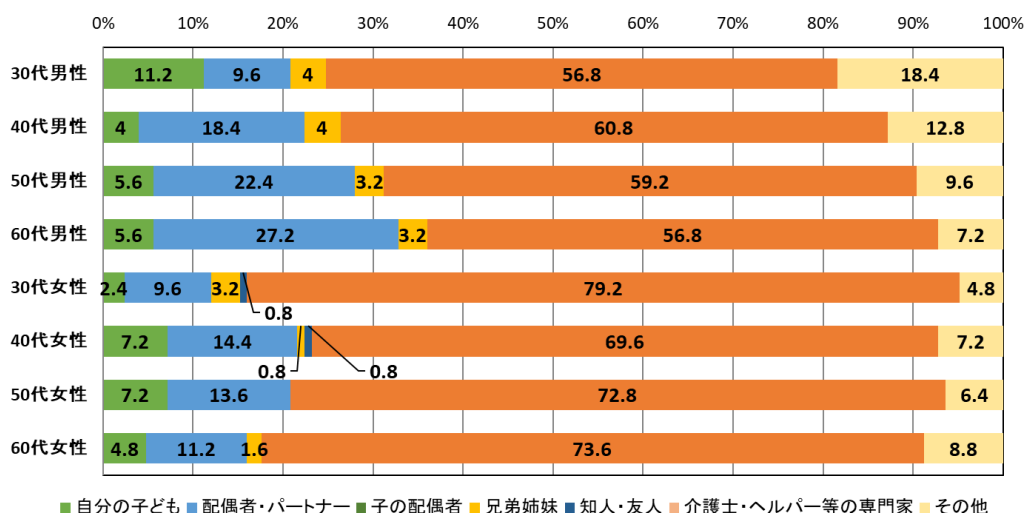
Q 6. 自身が介護されることになった場合、だれに介護をされたいですか。最もあてはまる方をお答えください。(単一回答、n=1000)

- ・「介護士・ヘルパー等の専門家」と回答した人が最も多く、66.1%となった。
- ・「自分の子ども」介護してもらいたい人の割合は6.0%で、全体の1割以下となった。また、「子の配偶者」と答えた人は全世代・男女ともに一人もいなかった。
- ・性別、世代に分けてみると、「配偶者・パートナー」と答えたのは60代男性が最も多く27.2%、「介護士・ヘルパー等の専門家」と回答したのは30代女性が最も多く79.2%となった。

自身が介護されることになった場合、だれに
介護をされたいか



性別・世代別の回答割合



＜将来起こりうる介護に対する認識についての調査まとめ＞

ここまでの調査では、将来起こりうる、親や自分自身の介護について尋ねてきました。まだ身近で介護が必要な状況になっていないことから、親や自身の介護について想像がつかず、「分からない」と考えている人が多いことが分かりました。一方で、親や自身に介護が必要になった場合、家族や親族に任せるのではなく、介護サービスの利用を検討している人の方が多いことも分かりました。介護は家族がするもの、という考え方が変わってきており、介護をプロに任せることに抵抗がなくなりつつあることが分かります。

しかし今後日本では、少子高齢化の進展に伴い、介護のニーズに対してサービスを提供する人材が不足する、「介護人材の需給ギャップ」が拡大すると見込まれており、厚生労働省によると、2040年には57万人もの介護人材が不足すると予想されています※。このままでは将来、介護を必要としている人に、サービスを提供できなくなってしまう恐れがあります。

※厚生労働省「第9期介護保険事業計画に基づく介護人材の必要数について」（令和6年7月12日）

https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000207323_00005.html

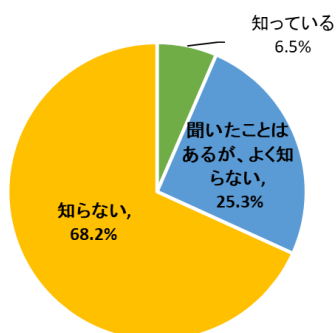
「介護人材の需給ギャップ」を解消し、介護が必要な方にサービスを提供していくためには、データ・テクノロジーを積極的に活用しながら、介護サービス品質の向上や職員の業務負担軽減を進め、人は人にしかできない業務に集中できる環境を整えていく必要があります。

ここからは、介護現場で広がりつつあるデータ・テクノロジーを活用した介護について知っているか、またどのように考えているか、尋ねました。

Q 7. 現在介護現場では、介護を必要とする人の生活をより快適にする・生産性を向上させるといった目的のために、様々なデータ・テクノロジーを活用しています。介護現場でデータやテクノロジーが活用されていることを知っていますか。(単一回答、n=1000)

- ・「知っている」と答えた人は、わずか 6.5%。
- ・「知らない」(68.2%)と「聞いたことはあるが、よく知らない」(25.3%)を合わせると約 9 割。介護現場におけるテクノロジー活用は、まだほとんど知られていないことが明らかになった。

介護現場でデータやテクノロジーが活用されていることを知っているか

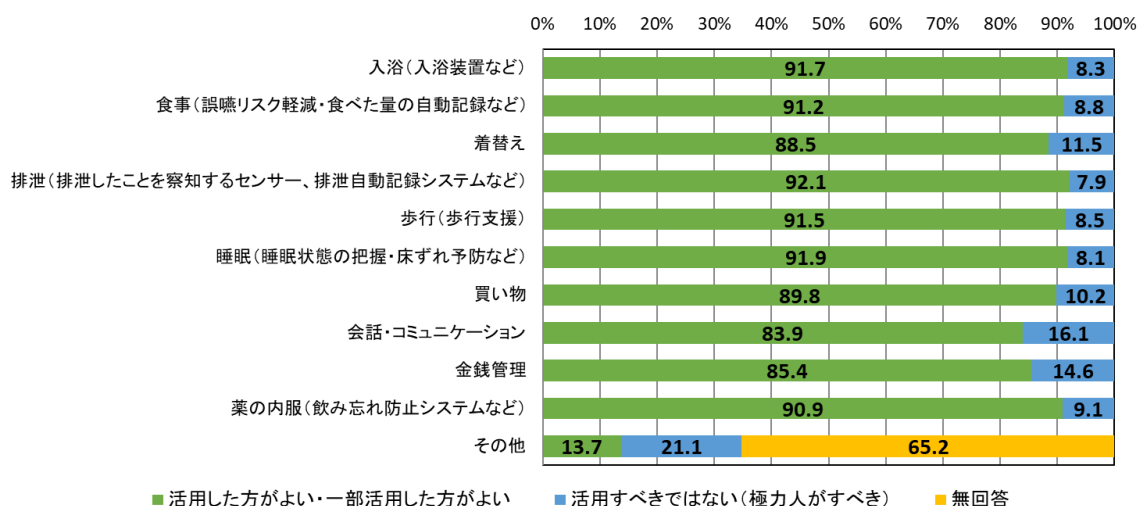


Q 8. 介護は、暮らしの様々な場面で必要となります。積極的にデジタル・テクノロジー化、ロボット技術を活用した方が良いと思う介護の各項目についてお答えください。(n=1000)

※回答にあたり、実際のテクノロジー画像や、テクノロジーを活用した介護に関する動画を視聴のうえ回答してもらった。

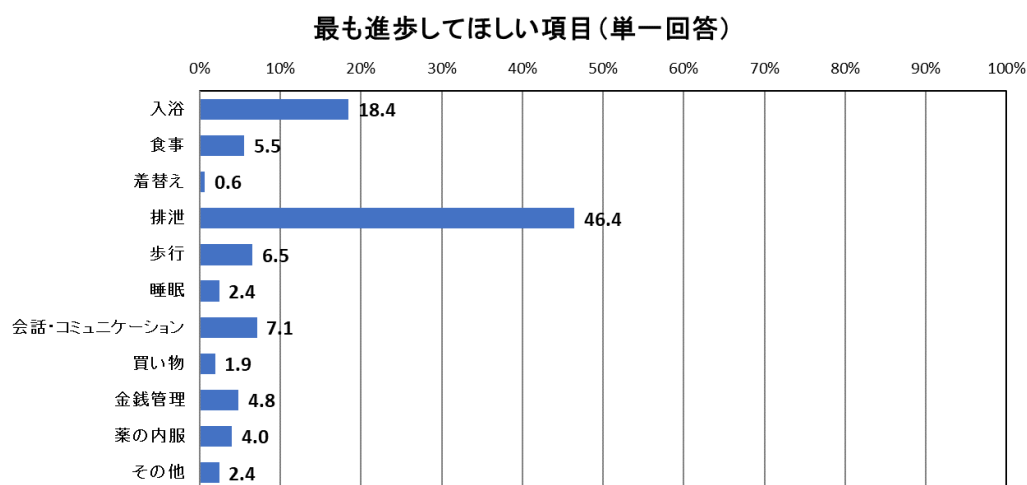
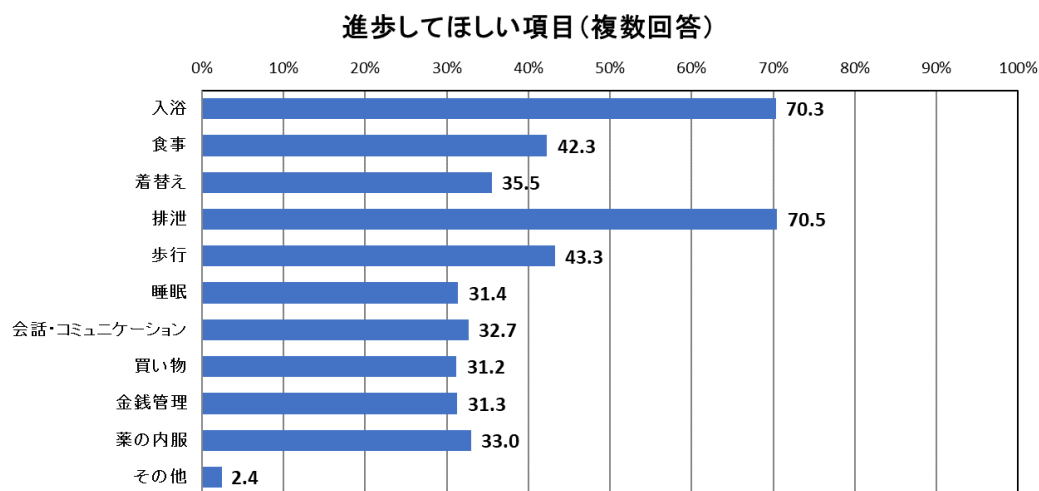
- ・最も多かったのは「排泄」で、「活用したほうがよい」「一部活用したほうがよい」を合わせると 92.1% となった。
- ・次いで多かったのは、「睡眠」(91.9%)、「入浴」(91.7%)だが、そのほかの項目も「活用したほうがよい」「一部活用したほうがよい」を合わせると 8 割を超える結果となった。

デジタル・テクノロジー化、ロボット技術を活用したほうが良いと思う介護の項目



Q 9. 介護において進歩してほしい項目（データ・テクノロジーの活用等）をすべてお答えください。その中で、最も進歩してほしい項目を1つ教えてください。（複数・単一回答、n=1000）

- ・「進歩してほしい項目」では「排泄」が最も多く 70.5%となった。また、「入浴」も「排泄」よりは少ないものの、70.3%という結果となった。
- ・「最も進歩してほしい項目」でも「排泄」が最も多く、46.4%となった。



<回答の理由>

「排泄：一番日常生活に必要なものだが、一番手がかかり大変」（兵庫県・32歳女性）

「排泄：一番センシティブな領域だからこそ、非人間性に委ねたい」（東京都：49歳男性）

「入浴：人の手を借りなくて済むにこしたことはないから。」（島根県：男性31歳）

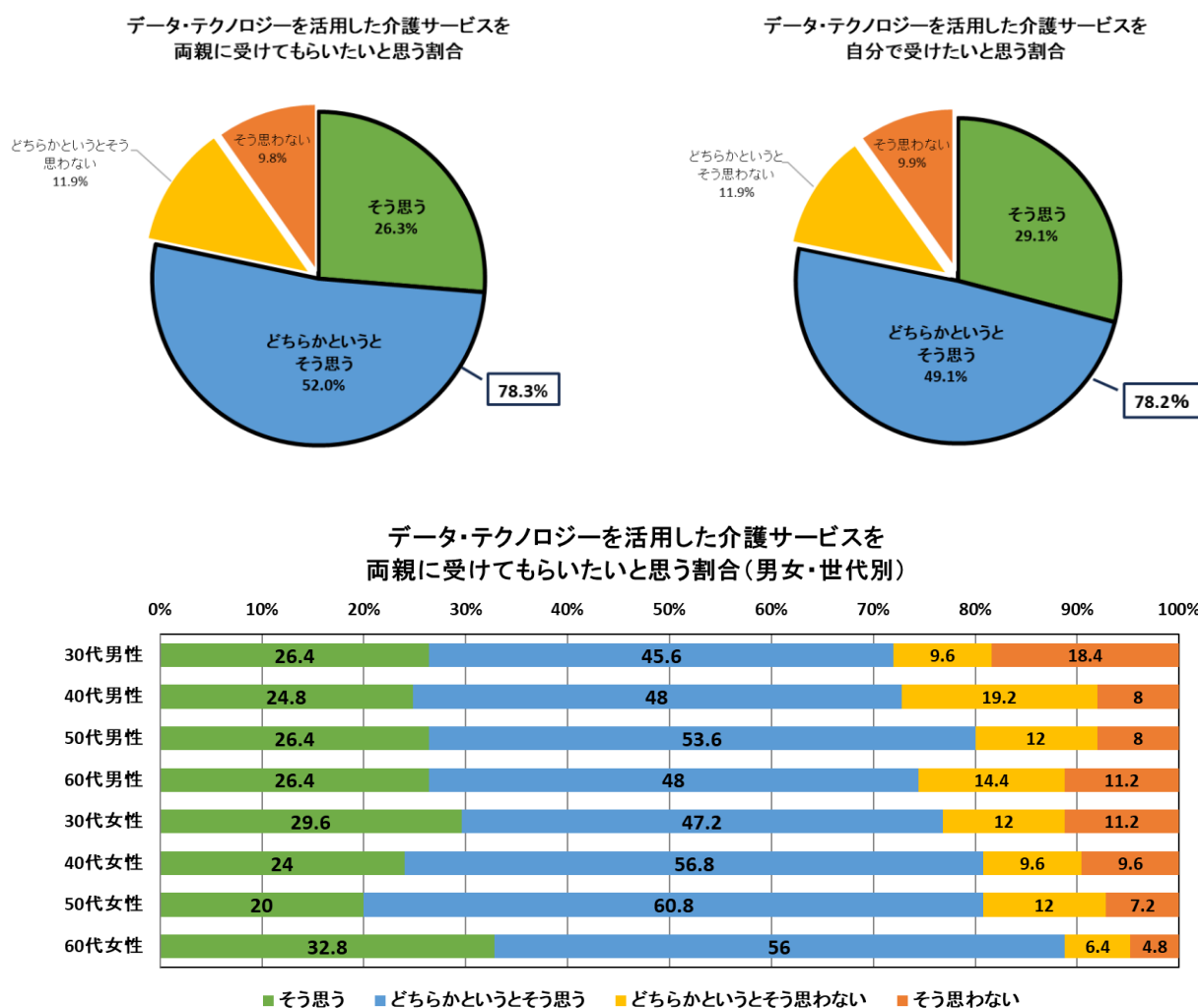
「食事：人間にとって、もっとも楽しみの一つだと思うから。」（千葉県：男性59歳）

「歩行：介護者の身体的負担が軽減されるなら、安くて良い機械が導入されてほしい」（徳島県：女性44歳）

Q10. データ・テクノロジーを積極的に活用した介護サービスを両親（義父母を含む）に受けてもらいたい、または自身で受けたいと思いますか。（単一回答、n=1000）

※両親：自身の父親と母親または、そのどちらか

- ・「そう思う」と「どちらかと言うとそう思う」を合わせると、自身の両親に受けてもらいたいかどうかは 78.2%、自分自身で受けたいかどうかでは 78.3%となり、約 8 割の方がデータ・テクノロジーを活用した介護に肯定的な結果となった。
- ・世代、男女別でみると、「そう思う」と答えた人が最も多いのは、自身の両親・自分自身ともに 60 代女性（32.8%）で、「そう思わない」と答えた人が最も多いのは、自身の両親・自分自身ともに 30 代男性（18.4%）となった。



Q11. 介護において、今後のデータ・テクノロジーの活用を期待することや、それによるメリットを教えてください。（記述回答）

- ・「データ・テクノロジーの活用を期待すること」では、人力的問題、体力的問題解決に繋げることで、介護を受ける側だけでなく、する側の負担軽減を期待する声が多く挙がった。

「人手不足やミスを減らしたい」（東京都・43 歳女性）

「介護は力仕事でもあることを熟知しているので、人間の力では及ばないことを、データやテクノロジーで何とかしてほしい」（静岡県・50 歳女性）

「あまりにつらいイメージがあるので介護施設の人がもっと楽になればいいなと思う」（秋田県・31 歳女性）

「テクノロジーに任せて、スタッフの方に余裕ができたなら、その時間でおしゃべりしたりお散歩に連れて行ってもらったりしてほしい」（大阪府・62 歳女性）

「データやテクノロジーにより、介護者の負担が減り、より介護の質が上がること」（東京都・39 歳男性）

「介護する人の体力的な負担が減ることで、仕事する方も仕事しやすくなり、なり手が増えるのではないかと考えた」（宮城県・54 歳女性）

「テクノロジーの活用により介護する人もされる人も精神的に楽になれると感じるから」（東京都・66 歳女性）

Q12. 介護において、（ロボット技術やデータ・テクノロジーではなく）人にしかできないと思うことは何ですか？（記述回答）

- ・ 「人にしかできないと思うこと」では、気持ちのこもったコミュニケーションや、介護を受ける側への寄り添いなど、人と人ならではの温かみのあるコミュニケーションが多く挙げた。

「気遣いや、先回りした行動、とっさの判断」（大分県・33 歳女性）

「相手の感情に合わせた会話」（宮城県・63 歳女性）

「介護される側の心に寄り添うこと」（埼玉県・63 歳女性）

「コミュニケーション（傾聴・受容・共感）などは人にしかできないのではないかなと思う」（広島県・61 歳女性）

「温かみのある会話」（福岡県・32 歳男性）

「会話等の癒やしの部分」（岐阜県・62 歳男性）

「曖昧さ、エビデンスにないものを臨機応変に考えることができる」（千葉県・55 歳女性）

「心を癒やすコミュニケーションはテクノロジーには代替出来ないと思う」（東京都・66 歳女性）

<データ・テクノロジーに関する調査まとめ>

介護現場でのテクノロジー活用に関する質問では、約 9 割の人が、介護現場でデータ・テクノロジーの活用が進んでいることを知らない、と答える結果となりました。まだまだ、介護現場におけるデータ・テクノロジーの活用が知られていないことがうかがえます。

一方で、データ・テクノロジーを活用した介護サービスを受けたいかどうか、という質問に対しては、約 8 割の方が「そう思う」もしくは「どちらかというと思う」と回答する結果となりました。データ・テクノロジーの活用が進むことや、そういった介護サービスを受けることへの抵抗は少ないことが分かります。

4. SOMPO ケアが取り組む「未来の介護」

少子高齢化が進む日本では、介護を必要とする人と介護を担う人のバランスが大幅に崩れることが予測されています。また、生産年齢人口が減少していることから、社会保障制度の行く末にも不安の声が高まっています。

当社はこうした社会課題に立ち向かうために、ご利用者へ提供する介護サービス品質の向上と、職員の業務負担軽減を両立する「未来の介護」の実現に挑み続けています。

「未来の介護」を実現するために、データの活用やテクノロジーの導入、さらには現在行っている業務の見直しを実施しています。将来に向かって拡大していく介護人材の不足を見据え、介護現場の変革を確実に進めていくことで、日々の業務の徹底的な効率化を図っていきます。その上で、ご利用者にはエビデンスに基づくより良い介護を、そして職員には人にしかできない介護に注力する働き方の実現を通じ、今まで以上のやりがいと誇りを提供します。

【SOMPOケアが目指す未来の介護】

<https://corporate.sompocare.com/mirainokaigo/>

■「未来の介護」の実現に向けた、3つの挑戦

(1) データプラットフォーム構築による、ケアマネジメントサイクルの最適化

当社では、全国の400以上ある施設をはじめとした、フルラインナップで提供する介護サービスを基盤に、10万人以上の実生活に紐づくデータと、多職種による豊富な専門的知見・ノウハウを所有しています。ご利用者の健康状態から職員の活動状況まで、あらゆる情報をデータ化し集約しています。これらを活用することで、個々のケアマネジメントサイクルを最適化し、高品質なケアの提供や職員の業務負担軽減のほか、施設・事業所運営の効率化を進めていきます。

(2) 実装が進む、未来の介護を支える様々なテクノロジー

最先端の介護テクノロジーを組み合わせ活用することで、ご利用者に提供するケア品質の向上と、職員の業務負担軽減の両立を追及し続けています。しかし、テクノロジーをやみくもに導入しても全てが解決するわけではありません。それぞれの介護現場における課題を正しく検証したうえで、適切なテクノロジーを導入し、活用しています。

(3) 業務の見える化、時間創出による「やりたい介護」の実現

当社では、介護現場における業務の見直し、見える化を行い、ご利用者がより適切なサービスを受けることができ、そして職員の負担が減るよう、業務の改善を行っています。

介護の現場では、食事介助や移乗介助といった専門技術を要し、介護職にしかできない「直接介護」業務と、食事の準備や掃除など専門技術を要しない「間接業務」が存在します。これを業務の組み換えによって「直接介護」を専門に行う職員と「間接業務」を専門に行う職員に分けるとともに、テクノロジーの活用などによって効率化。時間の創出が可能になりました。創出された時間は、ご利用者のやりたいことの実現や職員の自己研鑽のほか、ご利用者との日々の関わりをより充実させることにも活用されています。

ご利用者にもっとゆっくりお話を伺いたい、ご利用者のためにもっと時間を使いたい、といったこれまで業務に追われて十分にできていなかった「やりたい介護」を実現できるようになり、職員の働きがい向上にもつながっています。

5. 今後について

当社は今後も、高品質なケアの提供と職員の業務負担軽減が両立した「未来の介護」に取り組み、推進していくことで、「介護人材の需給ギャップ」解消に貢献し、日本の未来を創っていきます。

以上